

釧路湿原・阿寒・摩周
シーニックバイウェイ



薩摩よりみち
風景街道

姉妹ルート盟約を締結

令和7年1月27日に釧路湿原・阿寒・摩周シーニックバイウェイは、薩摩よりみち風景街道と姉妹ルート盟約を締結しました。締結式は鹿児島国道事務所で開催され、釧路湿原・阿寒・摩周シーニックバイウェイ5名、dec3名の計8名が北海道から鹿児島へ赴きました。締結に至った経緯と今後について報告いたします。

dec地域政策研究所 大橋 一仁

永山峠の標柱復活と薩摩よりみち風景街道

釧路湿原・阿寒・摩周シーニックバイウェイでは、永山在兼氏の功績を後世に語り継ぐため、かつて阿寒横断道路の双岳台駐車帯にあった永山峠の標柱を令和6年9月に復活させました。永山峠標柱の除幕式には、永山在兼氏の生誕地で活動する薩摩よりみち風景街道から田島様に参加いただき、交流を深めました。その際、「釧路市と鹿児島県日置市は永山氏のつながりから姉妹都市を締結しているほか、釧路市と鹿児島県出水市はツルのつながりから友好都市を締結しており、ルート同士で姉妹ルートを結ぶことで相乗効果が生まれるのではないか」という話となり、盟約を締結する運びとなりました。

姉妹ルート盟約の締結と今後

令和7年1月27日に鹿児島国道事務所にて、姉妹ルート盟約の締結式が行われ、釧路湿原・阿寒・摩周シーニックバイウェイと薩摩よりみち風景街道は姉妹ルートとなりました。今後、姉妹ルートの経緯をポスターにして、お互いの活動エリアでPRするほか、特産品の相互販売やお互いのルートの写真を相互に展示するなど、協力をしていきたいと考えています。

鹿児島を訪問してみよう

1月下旬にもかかわらず最高気温がなんと15℃。北海道であればGWのようで、大変気持ち良く滞在できました。鹿児島には、おいしい郷土料理（さつま揚げ、豚しゃぶ、きびなご…）に、西郷隆盛や特攻基地となった興味深い歴史があります。加えて、薩摩よりみち風景街道のエリア内には、ツルや夕日など豊富な自然景観もありました。この姉妹ルート盟約の締



調印後の田島氏(薩摩よりみち風景街道副会長:左)と
桐木氏(釧路湿原・阿寒・摩周シーニックバイウェイルート代表:右)

結を通じて、交流人口の増加につながるよう尽力していきたいと思っています。



道の駅阿久根から見る東シナ海

釧路土木派出所長 永山 在兼氏

永山在兼氏は、鹿児島県東市来村(現:日置市)に生まれ、大正時代に釧路土木派出所長に着任しました。当時、道路交通網が未発達な中、国立公園指定に向けた観光道路の必要性を訴え、阿寒横断道路(国道241号)の整備に尽力しました。永山氏は、4代目幣舞橋(釧路市)の架橋に携わったのち、旭橋(旭川市)の建設にも携わるなど、釧路地域のみならず、北海道の道路網発展に大きく貢献しました。

編集後記

1月30・31日に新潟県上越市で開催された「ゆきみらい2025 in 上越 ゆきみらい研究発表会」に参加してきました。最終日に行われた口頭発表では、「未来を紡ぐ雪国文化」をテーマに様々な取り組みが発表され、札幌からは石狩空知みち学習で教材開発や研究授業を実践いただいている札幌市立桑園小学校 木田孝紀先生が口頭発表に臨みました。北海道開発局と札幌市の「除排雪に関する協定」を題材に、札幌市における「雪学習」の課題やその課題を解決するための単元計画や研究授業の実践について言及されました。(R.W)



写真:木田先生の発表の様子。素人にもわかりやすく発表され、一緒に参加していた私たちも鼻高々で会場を後にしました。

dec monthly vol.473

2025年2月1日発行

発行人

倉内

公嘉

発行所

一般社団法人

北海道開発技術センター

〒001-0011 札幌市北区北11条西2丁目2番17

TEL (011) 738-3363 FAX (011) 738-1889 URL <http://www.decnet.or.jp/>

E-mail dec_inf001@decnet.or.jp

dec



Hokkaido Development Engineering Center

dec monthly

2025.2.1 vol.473 デックマンスリー



● Monthly Topic (マンスリートピック)

第40回 寒地技術シンポジウム

dec Interview >>> 株式会社玉川組 建設部維持課 工事長 舟見 群章氏

「皆で知識ゼロから始めるICT活用」。このような副題が付いた冬期道路管理の実践報告が「第40回寒地技術賞・産業賞」に輝きました。受賞者は恵庭市の(株)玉川組で現場代理人を務める舟見群章さん。現場の誰もが作業を楽にこなせるように、という思いが込められたDXの取り組みを同社でうかがいました。

寒地技術賞の受賞のご挨拶で「除雪機械のオペレーターなど作業員の仕事が長く、現場代理人(現場監督)としての経験はまだ浅い」と自己紹介されていました。現在のお仕事に至る歩みをお聞かせください。

職歴の最初は警備会社の社員で、道路工事の交通誘導員です。18歳で結婚し、生計のために専門学校を中退して働き始めました。5年ほどして舗装工事会社に移り、舗装現場の施工作業に携わるように。その会社が玉川組の下請け業者だったので、舗装工事が減少する雨天時や冬期間に玉川組の道路維持作業を手伝わせてもらうようになりました。玉川組は恵庭市を中心に道央圏で事業展開する総合建設会社で、道路維持管理事業では国道36号、337号、道央圏道路を主管しています。

少しずつ維持管理の仕事が増え、30歳ごろから道路清掃の散水車や凍結防止剤の散布車などの仕事为主になりました。舗装会社を離れて玉川組の

作業員になったのは2016年、37歳のとき。当時、長男の大学進学費用を稼ぐために副業ができた方が有利だったので、職員でなく作業員として働きました。やがて教育費の心配がなくなったので、自分の好きなように仕事しようと思い、資格をとって同社維持課の職員になりました。それが2020年のことで、そのころからパソコンを本格的に勉強し始め、事務作業にも携わるようになりました。

道路維持業務には幅広い知識が必要ですが、自分自身のために必要な知識をネットも活用して記録し、スマホでいつでも引き出しやすいように自分用のメモをつくる作業を始めました。それがICTに取り組む発端です。

そうした個人的な取り組みが進展するきっかけには、どんなことがあったのでしょうか。

玉川組の職員になった際、維持課の現場管理の仕事は一通り経験しておきたいと思い、未経験だった道路附属物点検(定期巡回)の仕事をさせてほしいと上司に頼んで1年間取り組みました。標識や照明、集水桝などの道路附属物は膨大な量(札幌開発建設部千歳道路事務所管内の施設数で約117,500基)があり、現場では逐一、写真を撮るなど手間をかけて点検結果の報告書を作成します。しかし、紙ベースの報告書では、提出後の活用がしにくそう現場の労力が報われない気がしました。

現場の作業員目線を大事に、ICT・GISツールを活用して道路維持管理の情報共有と「見える化」に取り組んでいます。働き方改革や担い手育成を支えていきたい。

dec Interview

ふなみ ともあき

1978年兵庫県生まれ。96年札幌科学技術専門学校在学中に結婚し、生活のため警備会社に就職。その後、舗装工事会社を経て16年から(株)玉川組の作業員に。20年正職員となり、23年から現職。道路維持業務の現場代理人として勤務。2021年度「北海道開発技術研究発表会北海道開発協会奨励賞」、24年「寒地技術賞(産業賞)」を受賞。また(株)玉川組は「北海道開発局i-Con奨励賞2024」受賞。趣味は観光(特に花畑めぐり)、ガーデニング、DIY、バイク・ツーリング、サッカー、ゲームなど多彩。

それで、まだPCも詳しくないころでしたが、点検結果のデータ蓄積の活用ができないかと個人的に試行錯誤を重ね、やがてグーグルマップで道路附属物の位置情報を記録して写真を貼り込む方法を考えついて少しずつ空いた時間で作業していったのです。さらに、その巡回データをクラウド保存すれば、現場でも情報共有できて活用しやすくなり、点検作業の効率化につながると考えました。

そんな取り組みをしているときに、札幌開発建設部千歳道路事務所の中山光広氏が「何か新しい取り組みがないか」と話しているところにたまたま居合わせました。すかさず、横から「あります」と手を挙げて、自分の取り組みを伝えたことがきっかけになり、千歳道路事務所で定期的で開催されているCPDS(全国土木施工管理技士会連合会運営の継続学習制度)の講習会で講師を務める機会を得ました。2020年7月のことで「定期巡回の働き方改革(基礎編)」と題してGISサービスやクラウド利用などで可能になる道路巡回作業の効率化について発表したのです。



CPDS講習会の様子

このような取り組みは間もなく千歳道路事務所の方々との共同研究に進展し、2021年度北海道開発技術研究発表会で「ICT・クラウドサービスを用いた道路維持管理～道路附属物のID統一からはじめる年維持技術者の働き方改革の志向～」(堀越弘美[札幌開発建設部千歳道路事務所]、畠山賢一[同]、舟見群章)を発表し、「北海道開発協会奨励賞」を受賞することができました。

その後、現場代理人になられたのを機に、冬期道路維持管理のノウハウ

を網羅し、作業従事者の情報共有に役立つシステムづくりに着手。現場での試行を重ねてくれました。

2023年に前任者の体調不良で現場代理人を務めることになったのですが、道路維持管理に関する業務は雪対策から植樹管理まで幅広く、知識もデータも膨大です。当時はパソコン、書類事務、管理職、いずれも初心者の私でしたから、以前から続けていたネットを活用した自分用のメモの充実に一層、力を入れました。

さらに、そのように集めた情報を現場の作業員全員、また発注者とも共有できれば、作業の効率化や働き方改革につながると考え、「誰でも、必要な時に、必要な情報を、より簡単に」をテーマに試行を重ねました。その取り組みをまとめたのが、昨年、寒地技術賞をいただいた「ICT・GISサービスを用いた冬期道路管理～皆で知識ゼロから始めるICT活用」です。

具体的には、冬期維持管理に必要な知識、データを集約した独自のホームページを作成し、作業員は作業用のアカウントで各自のスマホやタブレットから閲覧して情報共有します。掲載情報は、ごく一般的に使われているグーグルのウェブサイト作成ツールやクラウドサービス、ウェブマッピングのアプリケーションで作成しています。内容項目は別表(表1)のようで、担当工事の路線情報を

(表-1) ホームページ掲載情報

路線情報
道路カメラ
維持工事事務所、作業・行事予定表
道路事務所・維持工事事務所非常時当番連絡表
冬期道路維持管理情報
工事配番表
実施作業フォトアルバム
舗装欠損箇所報告
道路附属物情報
連絡体制表
維持工事作業手順
写真管理手順
書類作成手順
維持台帳図・その他図面
作業状況動画・機械説明動画・関連動画
附属物、その他施設・調査状況・植樹管理マップ
管内距離標マップ
作業実施基準
その他資料
気象情報等の外部リンク

はじめ連絡体制や作業手順など約20項目あり、このホームページが作業員にとって「道路維持情報の引き出し」になっています。

特に力を入れているのはデータの「見える化」です。GISサービスの活用で、さまざまな道路情報の位置情報や状況報告をマップ上に登録しており、各種のマップはSNSでURLを貼り付けることでリアルタイムに情報共有できます。ホームページをベースにしながら、SNSを通じて作業指示や作業報告、発注者からの作業依頼なども迅速に行えるようになりました。

膨大な情報が閲覧できるシステムだと思えますが、具体的に現場でどのように活用されているのでしょうか。

ホームページの項目で最も閲覧数の多いのは「距離票(キロポスト)マップ」で、これまでに約4万6千回です。従事者20数人で各人1日約30回の頻度で見ていることになりましたが、作業報告に利用することが多いと思います。例えば「道路上の落下物を回収してほしい」などの発注者の依頼を作業員が受け、キロポストで自分と現場の位置を確認して作業し、報告を返すということなのです。

道路附属物のマップの一つに「集水枡マップ」があります。道路脇に設置されている集水枡は泥が半分程度たまれば清掃しなければならぬのですが、現場では位置が確認しづらく、特に冬は雪で埋まってわからない。従来は金属探知機で探したりしていたのですが、位置情報を記録したマップで新人でも容易に見つけられるようになりました。堆積した泥の量についても記録しており、どこを清掃すればいいかも可視化されています。

除雪作業については、期間雇用を含む新旧さまざまな60名の作業員が連携して作業するので、連絡体制や作業内容の共有が必須になります。スマホで迅速に確認したり、連絡を取りやすくなっていますが、それだけで



GISアプリでの打合の様子

なく中古携帯を配布して会社用のアカウントをつくり、現場カメラとしても活用しています。Wi-Fiが繋がった時点で自動的にアップロードされ、作業員間や事務所で作業状況を視覚的に確認することができます。

同じく冬期管理の課題として最初のころに取り組んだのは、発注者に報告する凍結防止剤の水溶液使用量や散布面積の計算でした。今までは現場従事者に記入してもらった書類をパソコンで入力してから計算しており、非常に手間がかかっていましたが、ペーパーレス化を図り、現場で直接、報告書類に入力すれば自動で算出できるようになりました。

動画はホームページに300本程度アップしており、機械操作の説明などに活用していますが、普段と異なる特殊な作業を行うときの記録にも役立ちます。例えば、シーニックバイウェイ北海道の冬の催し「えにわシーニックナイト」では、国道36号の歩道沿いにアイスクャンドルを飾るための雪のステージをつくるのですが、仕上げに真四角に雪を固めるなど特殊な作業が必要です。作業手順を動画で収録しておけば未経験の作業員にも伝えやすいですね。

また、高速道路が通行止めで一般国道が渋滞している場合、スタック車両が出ないように特殊な編成で除雪や凍結防止剤散布の作業することがあります。一般車両を短い時間間隔で通行規制しながら、除雪機械やトラックなどで作業するのですが、それも作業状況を動画で記録しておけば、オペレーターへの説明が容易になります。ちなみに、こうした除雪体制で近年はトラックなどのスタックが起因する車両滞留はほとんど発生しなくなりました。



YouTubeで作業説明をしている様子

成果は着々と上がっているようですが、現場の作業員の方々のICT活用の取り組みへの受け止めはいかがですか。スマホが苦手な方もおられたのでは。

数年前、道路附属物の定期巡回の試行を始めたばかりころは、やはり周囲に協力を求めるのがかなり大変でした。新しい作業に前向きな人からお願いしていったという感じです。今は全体に馴染んでほぼ大丈夫になったかなと思いますが、熟練者は自分の詳しくない分野を少し見る程度だと思います。経験の浅い方には作業の説明で使いますし、よく見てもらっていますね。

最近は、作業指示もSNSにURLを貼って伝えるようになり、それを見ないと仕事ができない状況になっているので、かなり浸透していると思います。また、作業員から「この作業の仕方を教えてください」とか「こんな情報はないか」などの声もあがるので、そうした意見や要望を聞きながらコンテンツを充実させています。

弊社は昨年、「一般国道36号北広島市大曲道路維持除雪外一連工事」で「北海道開発局I-Con奨励賞2024」を受賞しました。維持除雪工事での同賞受賞は前例がないと聞いており、少しでも維持除雪工事の働き方改革



i-Con奨励賞2024授賞式の様子

になればとやってきたので、嬉しく思っています。

今後のご活躍が楽しみですが、これからの目標は何でしょうか。

道路維持に関する情報共有のシステムについては、やりたいことの8割程度はできたので、さらに100パーセントに近づけたいと思っています。例えば、検索方法については、より手軽にAI活用の音声認識で知りたいことがすぐ出てくるようにしたいですね。

もう一つ、ぜひやりたいのは「ぶつからない除雪機械」のためのシステムをつくること。オペレーター不足の理由の一つは、除雪機械が縁石や附属物にぶつかって機械や施設を損傷させるリスクがあることで、免許を持っても、その責任を考えてためらう人は少なくありません。スノーポールなどである程度、危険ポイントは示されているのですが、吹雪時や投雪作業中には見えづらいということがあります。

なんとか安全に除雪機械を動かせたらと、現在、試行しているのは、寒地土木研究所さんのアプリ内におけるマップの座標管理で縁石など危ないポイントを把握しておき、中古のスマホを除雪車にセットして、近づけば位置情報で警告音が出るしくみです。電波が繋がっていない携帯でも位置情報だけで反応し、機能することが確かめられています。まだいろいろと改善が必要ですが、将来的にはセンサーをつけて機械の動作が止まったり、スピードが落ちたりという半自動運転のようなシステムに発展させられたらと思っています。

昨年の「寒地技術シンポジウム2024」では、「維持除雪工事が取り組むDX・i-Con～皆で始めるICT活用」と題してポスターセッションに参加させていただいたのですが、建設DXに取り組む同業の方々がたくさん参加されていて、自分たちとは全く異なる視点での取り組みも多く、刺激を受けました。今後、道内各地の維持除雪工事の現場代理人が交流できるような場やしきみをつくることができれば、と考えています。

第40回 寒地技術シンポジウム



Cold Region Technology Conference 2024

1985年にスタートした寒地技術シンポジウム(以下、CTC)は今回で第40回。decが標ぼうする「多視点」に基づき、記念企画の講演、リレートークをはじめ新たな趣向を交えたプログラムで開催されました。全国から寄せられた研究発表、ポスター発表は各49編。5団体19テーマの技術展示が行われ、8つの分科会とポスターセッション、2つの特別セッションで40回めの歴史を刻みました。

[2024年11月26・27日/札幌コンベンションセンター/主催:dec]

開会あいさつ



dec理事長 倉内 公嘉

先日、新潟県長岡市の雪氷防災研究センターに札幌の学生たちとお訪ねしてお世話になり、雪や寒さの研究ネットワークの絆を感じたところです。そうした絆の上に成り立ってきたCTCですが、今後も絆を深める一助を担っていきたいと思っています。

寒地技術賞表彰式

第39回シンポジウムの投稿論文73編を対象に各分科会・セッションの座長の推薦を経て選考委員会で審査が行われ、以下5部門各1編の受賞が決定しました。所用のため欠席の佐伯浩選考委員長に代わり、原文宏dec理事が選考結果を発表しました。

計画部門

スマホAI路面判定システムの実証とAI検知要素の拡張

中村 一樹、上石 勲
(以上、防災科学技術研究所
雪氷防災研究センター)、
仲条 仁(株式会社Create-C)



学術部門

中分雪堤の内部滑り型崩壊の観測と検証

杉原 幸信、渡邊 香歩、上村 靖司
(以上、長岡技術科学大学)、
岩崎 伸一、荒川 涼
(以上、株式会社ネクスコ・
エンジニアリング新潟)、
町田 敬(町田建設株式会社)



産業部門

ICT・GISサービスを用いた冬期道路管理 ～皆で知識ゼロから始めるICT活用～

舟見 群章(株式会社玉川組)



地域振興部門

寒冷地域における電線類地中化の 浅層埋設実証試験について

大部 裕次、岩田 圭佑、福島 宏文
(以上、国立研究開発法人土木研究所寒地土木研究所)
※授賞式欠席

地域貢献部門

小学校社会科における北海道での 国道除雪の教材化

～第4学年『自然災害から
人々を守る活動』の実践を通して～

木田 孝紀(札幌市立桑園小学校)



技術展示

会場では会期中2日間にわたり、(一財)国土技術研究センター・(一財)沿岸技術研究センター、(株)工学気象研究所、クリマテック(株)、(株)ハイク、(国研)土木研究所寒地土木研究所の寒地地盤チーム、寒地河川チーム、水環境保全チーム、寒地交通チーム、雪氷チーム、寒地機械技術チーム、地域景観チーム、寒地技術推進室によるパネル展示や資料配付が行われました。

CTCポスターセッション

暮らしの寒地技術抄 ～その1:林メソッド～ 三原 夕佳(dec)

「林メソッド」とは、苫前町古丹別地区で使われている汎用自立型流雪溝投雪補助装置のことです。開発者の林さんは「少しでも作業を楽にしたい」という発想からこの装置を開発したそうです。この装置は、ロータリー除雪機で飛ばされた雪がシートに当たることによって、雪塊が砕かれ、雪詰まりの発生を抑制することができます。この装置があることで、ご高齢の方などの投雪作業を代わりにすることも可能となり、地域内共助を支える大きな役割を果たしています。「林メソッド」は、投雪作業を効率よくする工夫が詰まっているだけでなく、共助に尽力する林さんの優しさを象徴しています。

キッズスノーウェア 金 貞姫(dec)

北海道の雪景色の中で、子どもたちが思いきり遊べるように一二人の子どもの母で元保育士の綱渕ひかるさんは、オリジナルの子ども用スノーウェアを開発しました。保温性や防寒性、動きやすさ、デザイン性を重視し、吸汗性にも配慮。保育士の声を参考に改良を重ね、今年ついに第一弾の商品化が実現できました。「子どもが自分で着られる、脱ぎやすい工夫をもっと」と語る綱渕さんは、防寒性能やデザインの向上と持続可能な生産を目指し、さらなる挑戦を続けています。北海道の冬、子どもたちの笑顔を引き出すウェア、これからの展開にも注目です。

冬季の水辺アクティビティ 野村 智貴氏(支笏ガイドハウスかあ)

冬季のカヌーツアーは、夏季に比べて参加者数が減少する傾向があります。寒冷な気候や装備への不安、安全性への懸念、「冬にカヌーはできない」という認識不足が影響している可能性があります。この課題に対し、アウトドアメーカー製の装備を充実させ快適さと安心感を提供し、安全性を強調した情報発信を実施します。また、SNSやSEOを活用した認知拡大、周辺ホテルへのチラシ配布、インバウンド市場へのプロモーションも行い、冬季ツアーの持続可能性を高め、地域や業界全体の発展に貢献することを目指しています。



「寒地技術シンポジウム40年の歩み」

原文宏(dec地域政策研究所長)

CTC開催のきっかけとなったのは1983年札幌開催の国際会議「北方圏開発技術交流会議」でした。官民さまざまな有志の協力により成果を上げたことから、寒冷地技術の取り組みを日本でも活発化させ、国内外に発信しようと「国内版を」の声が上がったのです。

先の国際会議の運営をボランティアで担った私は84年、29歳でdecに第一号社員として入社し、CTC第1回の運営実務を主担しました。目指したのは「学際的垣根を超えた幅広い情報交換の場」で、多種多様な団体、人々に精力的に参加を呼びかけました。折しも88年スタートの第5期北海道総合開発計画では「ふゆトピア(快適な冬の生活環境づくり)」事業が織り込まれ、これもCTCを盛り上げる追い風となりました。

黎明期のCTCではバラエティに富んだ取り組みが披露され、暮らしに身近で印象的な発表もありました。例えば、五番館西武百貨店による北国仕様商品(防寒着など)の開発、札幌市消費者協会による北国の衣食住に関する商品テスト、発明協会会長によるカップルの防寒に役立つ「ベア・ボシェット」の提案など。もちろん学術分野で

は吹雪や除雪対策、冷熱エネルギー、雪発電など先進的な研究が発表され、世論形成や政策的な動きにつながったものも少なかったと思います。

第40回開催を前に、decではCTCの現状課題と40年という時代変化を踏まえ、「多視点」の拡大を目指そうと新しい方向性を打ち出すことにしました。それは①査読論文の廃止(他の関連学会との連携を図る)、②多くの人々が参加しやすい「ポスター発表」を重点的に取り組む、③企画セッションを増やし、中長期的あるいはタイムリーなテーマを議論する場を増やす、ということです。また、発表論文は第40回からJ-STAGEに公開し、ポスター発表のデータはdecのウェブサイトで公開する方向で進めていきます。CTCが今後も末永く開催され続けられますよう、みなさまのご協力をお願いいたします。



「北方圏開発技術交流会議」実行委員会のメンバーの記念写真



ベア・ボシェットの提案資料

40歳から見た『ホッカイドウ』のこれまでとこれから



写真左より

〔ゲスト〕山岸 奈津子氏(一般社団法人SHIRAOI PROJECTS 代表理事)、定池 祐季氏(東北学院大学地域総合学部准教授)、猪熊 梨恵氏(札幌オオドオリ大学学長)、本庄 彩芳氏(北海道新聞社記者)

〔ファシリテーター〕小西信義(dec)

〔グラフィックレコーディング〕出村 沙代氏(株式会社たがやす)、アシスタント高橋 明美氏

CTCスタートの1985年と同時期に生まれ育った40代の方々を迎え、同世代の小西ファシリテーターを含む5名がこの世代から見た「ホッカイドウ」の課題と未来への思いを語り合いました。ちなみにカタカナ表記の「ホッカイドウ」には「北加伊道」、「Hokkaido」など表記の違いで見方が変わるため、それにとらわれずに考えたいとの企画意図がこめられています。フロアからも貴重な意見が寄せられ、グラフィックレコーディングで記録された関連な議論は後の懇親会でも披露されました。ここでは登壇5名の主な発言からご紹介します。

今40代。それぞれの歩みは

小西 60年前の児童向け雑誌では「未来予想図」が人気でロボットや空飛ぶクルマなどの絵が子どもたちを夢中にさせました。そういう夢想する無邪気さに寛容だったことがこの時代のイノベーションを支える源になったと思います。が、40年前になると「未来予想図」は飽きられて姿を消してしまふ。今、40代の私たちはバブル崩壊後の社会で人生の大半をデフレで暮らし、組織のなかでもまだ意思決定権のない宙ぶらりんな位置にある人が多い世代。今日はそんな世代で「ホッカイドウ」を考えたい。まずは自己紹介をお願いします。

山岸 札幌生まれで学生時代からイベントづくりに熱中し、卒業後は星野リゾート・トマムで企画広報担当を10年。その後、フリーで広報PRの仕事をした後、2022年から白老町に地域おこし協力隊として移住し、23年に一般社団法人を立ち上げました。アートを介することで地域が面白くなるという原体験をもとに、さまざまなまちづくり系の企画を進めているところです。

定池 剣淵町に生まれ、中学時代に住んだ奥尻島で北海道南西沖地震

(1993年)を経験。それをきっかけに災害研究者の道に進みました。氷河期世代ですが、研究職も厳しく、北大で博士課程修了後、神戸、札幌、東京、仙台と移り、現在の大学に。専門は災害の追悼、伝承、災害文化の研究で、防災教育の実践では道内約50自治体でお手伝いしてきました。特に2012年からご縁のある厚真町は18年の胆振東部地震で被災。その支援に携わって現在も定期的に通い、防災教育などのお手伝いをしています。

猪熊 札幌生まれで、札幌市立高専(現・札幌市立大学)の最終専攻は建築デザインでした。「まちづくりは人づくり」という恩師の言葉をきっかけにデザイン会社を経て2009年「札幌オオドオリ大学」を設立。「町をキャンパスに誰もが先生、誰もが生徒」をコンセプトに活動してきました。現在は子育て期間中で「働きながらの子育て」を研究するプロジェクトを中心に活動しています。障がい者福祉と老人福祉の会社経営にも携わっています。

本庄 札幌に生まれ、関東の大学を卒業後、2007年北海道新聞社に入社。札幌、中標津、函館を経て16～22年は本社経済部に。この間には除雪を切り口に人口減など北海道の課題を考える企画も担当しました。その後、東

京報道センターに異動し、全国展開している道内企業の動向や国土交通省を取材。現在は経済産業省を担当し、今まさに話題のラピダスについて取材しているところです。

広大な雪国で生まれた美質と課題

小西 では、「ホッカイドウの今とこれから」についてそれぞれの視点で見えるものとは。

本庄 人口減少が加速し、地元自治体が対策に苦労している一方、ラピダスや風力、太陽光発電への企業進出など首都圏では北海道の可能性に注目が集まっています。取材で実感する課題は、道内企業に首都圏や関西の企業に感じられるような前向きにPRするグイグイ感がないこと。霞が関にも「北海道の人は国がなんとかしてくれるとあぐらをかいているのでは」の声がある。おおらかさは魅力的ですが、商売っ気がないのが課題です。道内の自治体や企業の知人には、道外の動きを伝えた上で「一緒に頑張らましよう」と励ましたりしています。

猪熊 真っ白な雪景色は人の記憶や気持ちをリセットさせるところがあり、「春が来れば大丈夫」というようなおおらかさや待つことをいとわない

気質も雪国が育んだものでは。私はそれが好きだし、そういう雪国の人の特性は研究対象になると思います。

子育て研究関連で課題に思うことは、妊娠すると退職せざるを得なくなる女性が政令指定都市のなかで札幌市は比較的多いこと。国や市が女性活躍を推進し、制度が整えられても会社の現場ではあまり活用されていない。育休利用が職場にもたらしたプラスを見つけ、共有するなど、現場で積極的な制度活用を働きかけることが必要では。また、雇用を増やさないと北海道に人は残らない。経営者の立場としては企業努力も大事だと感じています。

定池 北海道の地域特性を考えるにあたり、災害伝承を例に挙げたい。道外では大規模災害の発生から一定期間、県主催の追悼式が行われるが、少なくとも南西沖地震以降、道は追悼式を主催したことがない。それだけでなく北海道では災害について話し伝えることがタブーかと感じられるほど語りにくいところがあります。実際は暴風雪を含め「災害のデパート」なのに、むしろキラキラした話を前面に出そうとしているかに見える。災害経験を丁寧に伝え、北国の自然への向かい方や作法を発信できるようになればと思っています。

山岸 北海道という括りが大きいためか経済や災害にかかわらず、他で起こっていることに対する「自分事だ」という気持ちが薄いと感じます。例えば白老のウポポイは国が主導して集客を推進しているけれど、自分た

ちの周囲から頑張って増やそうという地元の気運はあまり強くない。いいことも悪いこともうまく活用して便乗していこうという感覚が薄いのでは。また、雪によって育まれた気質や環境の恵みなどを私たちの特性として食欲に活用したり、価値として言語化していくことがこれからの課題だと思います。

「ホッカイドウ」の再定義—未来を拓いていくために

小西 では、「ホッカイドウ」の再定義ということで、文化人類学徒として道内の雪処理問題に関する研究に携わってきた僕からお話しします。以前、全国の博物館に所蔵する除雪具の種類について調査分析したところ、山形と新潟あたりに種類の違いの境界があり、まさに気温差による雪の乾湿の違いに対応していました。そこに人間が自然に屈することなく時代ごとに適応の術を培ってきたことが感じられ、僕たちには「北方適応の最先端にいる」という視点が必要では。そこから「ホッカイドウ(寒冷積雪地域)は人類の北方進化を支える地であり続ける」と考えたい。

山岸 40代は生活や経済をどうアップデートしなければならないかを考える中心的な世代。私としては産業などでは地域間連携が難しい胆振4市7町を、アートというレイヤーを重ねることで新たな地域のつながり方をつくり魅力を追求していきたいと思っています。そこでは地域で起こること

を「自分事として捉える」人たちと一緒にやっていきたいと思いますが、その「自分事化」がこれからの北海道をつくる上で大切だと思っています。

定池 道産子としての原体験は雪投げで、今も実家に帰ると雪かきを通じた助け合うコミュニティがあることを実感します。これからの北海道も雪や寒さという自然と付き合う心温かい人々が住む地域であり、助け合いのコミュニティであってほしい。そのためのお手伝いをしていきたいですね。

猪熊 新潟県越後妻有地域を訪れた際、山奥に住むあるおじさんが積雪期に銃もわなも使わずにうさぎを獲るという雪国の昔ながらの猟を実践していると知りました。こうした雪が降るからこそ可能になる暮らしの知恵はかつて無数にあったはず。そういう生活技術は記録しておきたいし、今後、私たちが経済と違うところでつながり合うときに役立つことだと思う。「過去のいいところを学びながら前を向く」ことを大事にしていきたい。

本庄 北海道は昔から「課題の先進地」と言われ、除雪の取材を通じて行政と住民の関係についてよく考えるようになりました。人口減少が深刻化する地方の市町村では、行政と住民が一緒に除雪体制を考えようという模索が進んでおり、そこに行政と住民の未来志向のあり方が見えてきます。東京勤務から北海道に戻ったときには、今日のお話を踏まえて、積雪寒冷地の未来志向の取り組みをうまく伝えていきたいと思っています。

リレートークの内容をイラストでまとめたグラフィックレコーディング

